

絵師としての狩野家は狩野正信から始まる。その正信を継いだのが、狩野元信（1476～1559）である。この元信のもとで狩野一門は繁栄の基礎が作られた。

現在、その元信の研究の基盤となっているのは、間違いなく辻惟雄「狩野元信（一）～（五）」（『美術研究』・同『戦国時代狩野派の研究』吉川弘文館に再録）である。そこでは元信に関する文献史料が徹底的に集められ、それらに基づいて元信の人物像と作品が多角的に論じられている。その「狩野元信（一）～（五）」の中で、改めて注目したい部分がある。元信の収入に関する部分である。

大坂石山本願寺の『証如上人日記（天文日記）』に元信が頻繁に登場する。元信は64歳だった天文8年（1539）から天文22年（1553）までの15年間、石山本願寺で阿弥陀堂や寢殿などの障壁画制作の仕事をした。残念ながら『証如上人日記』には記録が欠けた部分があるため、元信と大坂石山本願寺の関係の全貌は分からない。しかし、元信と元信周辺の絵師（新介、二郎三郎、源七）が石山本願寺で仕事をした期間、日数、そして報酬が部分的にはあるが具体的に分かる。

例えば、元信は天文17年に法眼位を得ているが、その頃から石山本願寺から元信への報酬額が上昇していること。史料から分かるだけでも合計で元信は約440日、新介は約580日、二郎三郎は約260日も石山本願寺に滞在して仕事をしたこと。その報酬の総額は、概算で元信が310貫文、新介が65貫文、二郎三郎が20貫文、源七同朋衆合わせて5貫文であること。辻氏は『証如上人日記』からこれらの事実を明らかにし、石山本願寺での仕事が狩野一門の生活を潤していたと指摘した。

ただ、この『証如上人日記』を新たな視点から読み直した場合、更に興味深いことが分かるのではないだろうか。例えば、元信たちが石山本願寺に滞在した時期である。彼らが石山本願寺に滞在したことが確実なのは、天文8年は10月15日から11月11日、天文16年は9月5日から12月26日、天文17年は8月24日から12月26日、天文18年は9月2日から12月25日、天文20年は7月3日から12月25日である。このことは辻氏も注目していて、元信たちは「大体年の中ごろから後半にかけて仕事をしており、年末に報酬を貰って京都へ戻るのが通例」だったと指摘している。

これは確かな事実なのだが、ここで一つ疑問が浮かんでくる。なぜ元信たちは年の中ごろから後半、つまり秋から冬にかけて通例のように石山本願寺で仕事をしたのだろうか。なぜ春から夏ではなかったのか。このことには何か意味があったのではないだろうか。

この点に関して、一つ気になることがある。当時の職人の労働時間である。現代とは違い、当時の職人は原則として日の出から日没までしか労働ができなかった（桜井英治「中世における物価の特性と消費者行動」『国立歴史民俗博物館研究報告』92）。従って、昼の時間が長い夏、職人は多くの労働時間を確保できる。その反対に昼の時間が短い冬、職人の労働時間は短くなる。夏至と冬至では昼の長さが約5時間も違うから、多くの仕事をこなすなら夏ということになる。

そのことが先の問題に関係しているのではないだろうか。昼が長い夏は多くの仕事をこなせる。そのため夏であれば、元信は京都の仕事場で門人たちを指導し、多くの仕事ができる。その結果、新たな注文先を開拓することもでき、狩野一門の収入も増える。しかし、昼が短い冬には多くの仕事をこなせない。労働時間が短くなる状況では、新規の仕事を獲得することも難しくなる。つまり、元信にとって昼が長い夏は稼ぎ時、昼が短い冬は厳しい時期ということになる。

では、昼が短い冬、どのように稼いだらよいのか。当然、元信は考えたはずである。最も理想的なのは、冬に定期的な仕事を確保しておくことであろう。これが出来れば、冬の間の収入減少を心配せずにすむ。そして、元信の冬の定期的な仕事が、15年間も続いた石山本願寺での障壁画制作だったのではないだろうか。石山本願寺としても、元信たちを稼ぎ時である夏に囲い込むことは難しい。そこで秋から冬にかけての時期、元信たちを石山本願寺に滞在させて障壁画制作をさせた。先の問題は、このように考えることができないだろうか。

狩野元信に関する文献史料は、辻惟雄「狩野元信（一）～（五）」でほぼ出尽くした感がある。今後も元信に関する史料を探してゆくべきだが、それだけではなく今まで知られている史料を新たな視点から読み直す必要があるのではないだろうか。